

しまくとぅば普及関係者各位

沖縄語教育研究 6

## 沖縄語の漢字表記のあり方 (3枚)

日本語の悪例をまねず

2009年10月21日

沖縄語研究家 船津好明

沖縄語の漢字の使い方を考えるとき、日本語の漢字の使い方の歴史を知ることは大変参考になります。そして日本語の悪例をまねないことが肝要です。

沖縄語と日本語とは事情が違います。日本語は書き手も読み手も日本語の話者です。沖縄語は書き手は沖縄語の話者ですが、読み手は日本語の話者であって、必ずしも沖縄語の話者ではありません。このことは決定的な違いです。

(日本語の悪例とは)

日本語の漢字の使い方の悪例とは、現在の学校教育の立場からみた過去の用例をいうもので、現在の沖縄語教育で参考にするには例が悪いという意味です。例えば日本語の「むかで」は足がたくさんある虫ですが、この言葉を漢字で「百足」と書いた最初の識者は、この考案に有頂天だったでしょう。何しろ二つの漢字を見ただけで「むかで」の姿が頭に浮かびますから、「百足」は傑作です。同じ発想の漢字表記は秋刀魚(さんま)など、日本語にはたくさんあります。「さんま」という音声の日本語が元々あって、これを漢字で書くのに、秋に獲れる刀のような姿の魚は、「秋刀魚」と漢字を三つ会意的に並べて「さんま」と読ませることにしたのでしょう。「おもと」の「万年青」も同じ感覚です。これらは音声言葉を漢字で書くのに、個々の漢字の本来の読み方とは関係なく、説明やいきさつなどから漢字を複数組み合わせさせて表記するものです。日本語はこういう発想の漢字を、過去にたくさん作りました。例示します。

あじさい いなか いれずみ おもと さんま しのめ せりふ たいまつ なたれ はせ むかで ゆり  
紫陽花、田舎、刺青、万年青、秋刀魚、東雲、台詞、松明、雪崩、長谷、百足、百合

これらの漢字は、作った当時は理由がありました。これらは文芸です。定着して現在も残って使われているものもあり、国語辞典にもみられます。

筆者はこれらを使うなどと言っているのではなく、このような発想で沖縄語の漢字を表記するのは、沖縄語の教育上好ましくない、と主張するものです。

(沖縄語の漢字の使い方の現状)

沖縄語のこれまでの漢字の用い方をみると、上記の日本語の悪例をまねた発想のものがたくさんあります。沖縄の言葉を日本語で説明するために漢字を使うもので、そういう使い方は沖縄語の教育には不適當です。例を挙げます。

「わらびぬくる」という沖縄語を漢字で書くのに、書き手はこの言葉を日本語で説明しようとして、自分の少年時代を意味するとして「<sup>わらびぬくる</sup>少年時代」と表記しています。女性なら「<sup>わらびぬくる</sup>少女時代」となります。また、自分の子供の頃が戦争中であることを言いたければ、「<sup>わらびぬくる</sup>戦争中」と表します。このように、同じ言葉なのに書き手によって漢字の用い方が異なるのは、教育上不適切です。適切な書き方は「<sup>わらびぬくる</sup>童ぬ頃」と、誰が書いても同じ書き方になるべきです。このほかの不適切な例を挙げれば、

<sup>いーちき</sup>命令、<sup>いっぺー</sup>大變、<sup>しーみ</sup>学問、<sup>がっていん</sup>承諾、<sup>ぐすーよー</sup>皆様、<sup>さんしん</sup>音楽、<sup>しきん</sup>社会、<sup>とっしぬゆる</sup>大晦日、<sup>とーふー</sup>中国式、<sup>ふいーじー</sup>普通  
など、際限なくたくさんあります。このような書法を推奨している指導書<sup>(1)</sup>が出回っているのは残念なことです。沖縄語教育では、これらは次の 印のように書くのが適切です。

× <sup>いーちき</sup>命令    <sup>いーちき</sup> 言一付き、    × <sup>いっぺー</sup>大變    <sup>いっぺー</sup> 一杯、    × <sup>しーみ</sup>学問    <sup>しーみ</sup> 墨、    × <sup>がっていん</sup>承諾    <sup>がっていん</sup> 合点、  
× <sup>ぐすーよー</sup>皆様    <sup>ぐすーよー</sup> 御衆様 (御総様)、    × <sup>さんしん</sup>音楽    <sup>さんしん</sup> 三線、    × <sup>しきん</sup>社会    <sup>しきん</sup> 世間、  
× <sup>とっしぬゆる</sup>大晦日    <sup>とっしぬゆる</sup> 年ぬ夜、    × <sup>とーふー</sup>中国式    <sup>とーふー</sup> 唐風、    × <sup>ふいーじー</sup>普通    <sup>ふいーじー</sup> 平生

(漢字の振り仮名は読むための補助)

日本語は教育の普及が不十分であった昔、全ての漢字に仮名を振っていた頃があります。振り仮名は、読み手に読み方を教えるための漢字への装飾であり、読むための補助です。日本語は現在教育が普及したので、通常の漢字に振り仮名はありません。

沖縄語の場合、現在教育は不十分ですから、漢字には振り仮名が必要です。十分に普及すれば、振り仮名は要らなくなります。

漢字は振り仮名があってもなくても、同じように読めなければなりません。沖縄語の教育で、振り仮名なしの「少年時代」を「わらびぬくる」と読ませ、「承諾」を「がっていん」

と読ませることは無理であり、学習負担が大き過ぎます。

( 沖縄語特有の漢字 )

沖縄語の中で、日本語での意味を示す漢字、あるいは古語の漢字を当てて、使用が定着しているものがあります。例えば、<sup>あがり</sup>東、<sup>くしく</sup>城、<sup>くち</sup>東風、<sup>じょー</sup>門、<sup>たー</sup>達、<sup>ちゃー</sup>達、<sup>なま</sup>今、<sup>ふえー</sup>南風 などは、日本語の漢字ではなく、沖縄語特有の漢字と考えるべきです。今後、沖縄語の中でこれに類する漢字を増やすことは、慎重であるべきだと思います。

( 結び )

要点を端的にまとめれば、沖縄語で「<sup>わらびぬくる</sup>少年時代」や「<sup>がっていん</sup>承諾」などを書くのは、表現の自由を主張する人が文芸として書く場合は別として、学習者に教えるべきではありません。学習者には「<sup>わらび</sup>董<sup>くる</sup>ぬ頃」、「<sup>がっていん</sup>合点」などと教えるべきです。

注(1) 宮里朝光他編著「沖縄ぬ暮らしと昔話」、沖縄語普及協議会、2006年

( 以上 )

照会先

〒1870002 東京都小平市花小金井 2-6-1

船津好明

Tel/Fax 042-467-1273

Email funatsu@mvf.biglobe.ne.jp